

私が考える「職業奉仕」

私が不動産業に携わって十数年が過ぎた頃、「職業奉仕」という言葉の意味をあらためて考えさせられる出来事がありました。ある冬の日、一人の若い母親が幼い娘を連れて店舗を訪れました。事情を伺うと、離婚に伴い急ぎ住まいを探しているものの、予算や生活環境の面でなかなか条件に合う部屋が見つからず、不安な毎日を過ごしているとのことでした。

私は、まず話をじっくりお聞きすることにしました。ご家族の生活リズム、お子さんの成長に合わせた将来の暮らし方、そしてご本人の大切にしている価値観。話が進むにつれて、単に部屋を紹介するだけではなく、安心して生活できる未来の姿まで寄り添うことが、私の役割なのだと気づいたのです。

数日後、ようやく条件に近い物件が見つかりました。しかし内見を終えて店に戻ると、彼女は「本当にここで良いのか自信が持てない」といいました。私は、焦らずに決めていただきたいと伝え、再度周辺環境や生活動線を一緒に確認しました。

帰り際、彼女は「こんなふうに私の立場で考えてくれる人がいるとは思わなかった」と深く頭を下げました。その姿に、私自身も仕事への充実感を感じました。後日、彼女から「新しい部屋での生活が始まり、娘も喜んで走り回っています。あの時の丁寧な説明が私の不安を消してくれました」とうれしいお言葉をいただきました。その言葉を聞きながら、私は改めて、職業を通して誰かの人生の一部に寄り添うことこそが奉仕であると実感しました。

「わかりやすい職業奉仕」とは、特別なことをするのではなく、日々の仕事の中で相手の幸せを思い、誠実に向き合うことだと私は解釈しています。私たちが扱うのは単なる物件ではなく、そこで暮らす人々の未来です。だからこそ、目の前の仕事を通じて社会の発展に寄与する機会と責任が、私たち一人ひとりに与えられているのだと感じます。

この経験は、ロータリアンとしての私の背筋を正すものでした。奉仕の心を内に育て、その心で日々の仕事にあたること。そして、自らの専門性を生かして、誰かの安心や希望につながる働きをすること。それこそが私の考える「職業奉仕物語」です。